

南 信子 — その幼児教育史上の位置 —

Miss Nobuko Minami, Her Position in the History of Early Childhood Education and Care in Japan

畠 山 祥 正*

要旨

本稿の目的は、「南信子・輪島道友による対談 あなたがたの教師はキリスト一人だけである——キリスト教保育の理念を求めて——」（『花の蕾のひらくとき』所収）を手がかりに、北陸学院保育短期大学（当時）設立のために南信子が招聘された経緯とその意義を、幼児教育史上に位置付けることである。南信子が戦前に学んだ保育内容と方法は、戦後の新教育につながるものであり、アイリン・ライザーは、そのことを明確に意識していた。

キーワード：教職論・保育者論／フレーベル／南 信子

はじめに

筆者は南信子先生（1914～2003）と直にお会いしたことがない者である。しかし、先生が雑誌等に発表されたものに1970年代以降ずっと注目してきた。（本稿は南先生を歴史的人物として位置づけるので、以下、南信子と記す。）

「キリスト教教育」の理論研究の多くは教育学か神学を専門とする研究者によるものであり、一方、実践研究はキリスト教学校や幼稚園の教師・保育者たちに多い。理論構築と実践がかみあわないというジレンマがついてまわるが、そのなかにあつて南信子は、経験的実践論を越えて理論構築を試みる位置にあつた。¹

南信子は、北陸学院保育短期大学（当時）設立のためにアイリン・ライザー（Iren Reiser, 1891～1969）によって招聘された。ライザーは、南信子が学んだ保育理論と実践を十分に理解して招聘したのであり、南信子もライザーが自らに託した意味をわかっていた。そのことは、「南信子・輪島道友による対談 あなたがたの教師はキリスト一人だけである——キリスト教保育の理念を

求めて——」（南信子編著『花の蕾のひらくとき

北陸学院幼稚園の物語』（2000年3月）390～404ページ、以下「証言」と略す）に記されている。南信子によるこの「証言」を歴史的に位置づける。

南信子は『花の蕾のひらくとき』について、「これはいわば「北陸学院保育の記録」「私家版」ですが、ここに寄せられた文章を「証言集」としてお読みなれば、活きた保育学の教科書になります。」²と語っている。しかし、重要なことが凝縮されているこの「対談」こそ教科書ではないだろうか。³

南信子によるこの「証言」を歴史的に位置づけるために年表1を作成し、右欄に「証言」を極力そのまま年代順に配置した。⁴左欄の年譜は、『幼な子とともに 南信子先生から学んだこと』⁵の年譜に、追加・修正を行ったものである。

* HATAKEYAMA, Yoshimasa
北陸学院大学 人間総合学部 幼児児童教育学科
教育学・教職論

年表1-1 南信子 年譜と証言

年 (T大正 S昭和)	南信子事項(ゴチ)・ 関係事項(明朝)	南信子・輪島道友「対談 あなたがたの教師はキリスト一人だけである」 (『花の蕾のひらくとき』所収)から。()内は同書ページ。 輪島道友氏は、金沢美術工芸大学教授
1914 (T2)	11月11日、富山県高岡 市に生まれる。 父・南 梅太郎、母・ たみ(高岡教会員)の 次女(第三子)。	輪島 お母様(南たみ)は、北陸女学校初期の卒業生で、高岡にあった北陸 女学校の附属幼稚園で先生をされていた。 南 私の生い立ちと関係がありますので、なぜ母が幼稚園で働くようになった か話しておきましょう。母の父、つまり私の祖父は金部為秋(かなべためあ き)といって、現在の北日本新聞の前身である高岡新報という新聞社の専務 で政治家を志していました。憲政会系です。家には若槻礼次郎とか永井柳太 郎といった政治家が出入りしていました。まあ、母はその当時の言葉で言え ば、乳母日傘(おんぼひがさ)で育ったのです。高岡には官立の女学校など ない時代ですから、わざわざ金沢の北陸女学校に出たのです。何度も衆 議院選に出馬しますがいずれも落選し〜一時は高岡市議をしていました〜手 広く営んでいた事業もうまく行かなくなり、落魄(らくはく)の晩年を送りま す。私が生まれた当時はまだ羽振りのよいときでした。母は祖父の新聞社の 記者と結婚しますが、若くして亡くなります。そこから私たちの苦労ははじ まるのです。母が働かなければならなかったのです。母は若いときに、亀 谷凌雲(かめがいらいりょううん)牧師から洗礼を受けています。それで当時高岡に あった北陸女学校の附属幼稚園で働くようになるのです。(394-395)
		南 この機会にもうひとつ打ち明けておきますが、私は保育者の道を本当は 歩みたくなかったのです。 輪島 それは本当ですか、だって先生のお母様(南たみ)は、北陸女学校初 期の卒業生で、高岡にあった北陸女学校の附属幼稚園で先生をされていたの でしょう。あのライザー先生に見込まれて、先生はこの道一筋、の方だと 思っていました。どうして保育者になりたくなかったのですか。 南 子どもの時から母の保育を見ていました。その保育が子ども心にもどう しても納得がいかないのです。あの型にはまったフレーベル式の保育です よ。集団で歩くときに手を後ろに組ませる。なぜかという、組んでないと 前の子にいたずらをするというのです。絵を描くといっても、ぬり絵です ね。自由に描けないのです。はあーい、赤のクレヨンを出して、リンゴを描 きます。線からはみ出さないようにぬるのですよ、という具合でしょう。ク リスマスの聖誕劇といっても先生の書いたセリフを暗唱させるだけ。ある時 こんなことがありました。ある子がリンゴのぬり絵で、上の方を茶色でぬっ たのですよ。先生が、どうして赤でぬらないの、と言ったところ、その子が 一言、「くさっとんがや」。こんな保育を見ていましたからね。まるで子 どもは囚人ですよ。キリスト教の幼稚園といってもこの程度。先にも話しま したように、1949(昭和24)年に北陸学院に赴任したときも、その保育は母 の時代の保育とほとんど変わりありませんでした。(394)
1931 (S6)	3月、高岡高等女学校卒業	
	6月16日、日本基督教会高岡教会において石川四郎巡回牧師より受洗	
	(その後、数年間、結 核のため和歌山県南部 みなべで療養生活)	私の療養生活とランバス入学とは深い関係があるのです。まさしく神様のお 導きとしか言いようがないような。私はランバスに入る前、和歌山県の南部 (みなべ)で療養生活を送っていました。升崎外彦(ますざきそとひこ)先 生が開いておられたサナトリウムです。升崎先生というのは金沢市の寺町 にある大源寺の出身ですね。救世軍の出ですが賀川豊彦先生と親交を結ばれ その影響を受けられた方です。・・・そのサナトリウムにランバスの学生 がキャンプに来るのです。伝道の実習です。彼らのモットーは、“All for Christ”です。その学生たちがなぜか私のことが気に入って、南さんをぜひ ランバスに連れて行きたい、ランバスはこんな学校だといって、まあえらい 宣伝をします。ところが、奨学金を用意する、生活費も宣教師が出す、あとは小遣い だけ。病気についても医者はどこにいても同じである、と言うのです。その 小遣いも、用意されていた。本当に不思議な話ですが、どなたがその小遣い を出してくださったのか今もってわからないのです。まったく匿名の善意で すね。しかもビタミン剤つきなのです。それでランバスに入ることができた のです。この時いただいた好意を、私はケニアに派遣されたときに——1963 ~64年、米国北長老教会から——なんとかお返ししたいと思い、ローナとグ レースの二人を留学生として招き、お世話したのです。(393)

年表1-2 南 信子 年譜と証言

1937 (S12)	4月、ランバス女学院 保育専修部に入学	輪島 話をランバス女学院時代に戻しましょう。もっとも深く影響を受けられた先生はどなたですか。これは通り一遍の質問ではなく、南先生の幼児教育の哲学あるいは保育理論がどのような背景のもとで形成されたのか、私自身、少し大仰に言いますと、日本の近代教育史の問題として考えてみたいからなのです。(395)
1939 (S14)	3月、同校卒業	と申しますのは、私が北陸学院に奉職して附属幼稚園を見学し、また息子の親としてその保育を体験するうちに、あることに気づいたのです。この幼稚園の保育は、J. デューイが十九世紀末にシカゴ大学で試みたあの「実験学校」（いわゆるデューイ・スクール）がモデルになっているのではないかと。南先生はどこで、どういう保育理論を学ばれたのか、また失礼ながら先生ご自身、その理論の依ってきたる背景をどのように自覚しておられるのかわかりたくなったのです。(395)
	4月、同研究科入学	南 もちろん高森ふじ先生はじめ何人も先生の影響を受けましたが、実際の保育ということになりますとやはり立花富先生ですね。私は立花先生の後を受けて、1945（昭和20）年3月敗戦の年に聖和幼稚園の主任になります。先生は後に西南女学院短期大学の教授を務められましたが、ランバス女学院保育専修部の第二回卒業生で、大正期の末に学ばれた方です。・・・大正の末年頃からランバスの保育は、形骸化したフレーベル式から「自由主義保育」へと転換します。この「自由主義保育」の実際の保育を担当されたのが、立花先生なのです。学生として「児童発達」と「児童音楽」を学びました。(395-396)
1940 (S15)	3月、同研究科卒業	輪島 それはどのような保育なのですか。 南 “free play and work”を中心とする「自由保育」です。この「自由保育」は、時に「一斉保育」に対する概念として理解されることがありますが、これは誤解もはなはだしいのであって、ひとつの「保育形態」を指すものではありません。まさしく保育「原理」の相違にかかわる教育の「哲学」の問題です。ランバス幼稚園では、保育科長であったクック先生の発案で「自由作業」を導入することから、この「自由保育」が始まります。昭和の初期ですね。(396)
		『聖和保育史』には次のような記述があります！立花先生ご自身の記述に基づくもの！。“自由保育といっても教師も子どもも不慣れなので、最初は毎日三・四種類の在来の手技材料（積木、紙類、粘土、画等）を紹介し、子ども各自が好きな材料を選び、それで思い思いに何かを作るという程度のことであった。しかし、やがて子どものほうから“こんなことがしたい”、“こんな材料がほしい”という目的のある要求が出されるようになった。／その最初のものが、男児はポート作りで木工関係の材料の要求（中略）、女児はままとのエプロン作りで布切れだった（中略）／要約すると、自由保育の第一の眼目は、子ども自身の潜在的なすばらしい能力を発見し、教師の助言によってそれを伸ばして行くところにある。たとえば自由製作の場合、教師の指導は側面から行われるべきであって、子どもは自分で考え、自身の発達程度の段階に応じて活動することが可能なのである。このことは教師たちが冷静に観察することによって確信にまで導かれたものであり、さらに子どもの成長発達は、大人が考えるよりも遥かに幾倍もの種々な様相において発現するものであることも理解されたのである”（一五二～三頁）。(396)
1940 (S15)	4月、岩国教会付属幼稚園主任 （後に関西学院の院長 になられる今田恵先生 の推薦です。先生の母 教会です。）(392)	長々と引用しましたが、この立花先生の実践こそ私の保育理論のバックボーンをなすものです。このキリスト教保育の理念を求めて実践を理論的に精緻にし、さらにキリスト教保育の理想—キリスト教における理想の人間像といってもよいでしょうが—とどう調和させるか、というのが私の終生の研究課題なのです。このような保育を金沢に定着させるために私がどんな苦労をしたか、ちょっと言葉では言えません。誤解だけではなく中傷もされました。今度金沢に来た南という若いのが、こともあろうに恩物を捨てた、などと言って。母の会やノーマル・クラスを通して、文字通り必死に闘いました。(396-397)
1941 (S16)	4月、日本メソジスト大阪鶴町教会付属幼稚園勤務	
1943 (S18)	聖和女子学院付属聖和幼稚園勤務	
1945 (S20)	4月、聖和女子学院付属聖和幼稚園主任（保育学部で教える） ⁶	

年表1-4 南 信子 年譜と証言

1950 (S25)	3月14日、北陸学院保育短期大学設置認可。5月1日、同開学式（司式南助教授）。北陸学院幼稚園は北陸学院保育短期大学附属幼稚園に改称。 4月、北陸学院保育短期大学助教授（保育学担当） 9月29日、番匠鐵雄北陸学院長就任式
1951 (S26)	3月、北陸学院、学校法人認可。10月1日、保母養成所（保育短期大学併設）開所式
1952 (S27)	4月、福井大学学芸学部非常勤講師（保育学担当）（～54年3月）
1953 (S28)	4月、北陸学院保育短期大学付属第二幼稚園開設
1954 (S29)	4月、北陸学院保育短期大学付属彦三幼稚園開設、5月、同付属ナースリースクール開園 9月、アメリカ合衆国アルマカレッジ（ミシガン州）に留学
1955 (S30)	4月、北陸学院保育短期大学付属幼児教育研究所開設 6月、ウィスコンシン、カナダ、ニューヨークに旅行した後、7月ナショナルカレッジ（イリノイ州）夏期講座出席、8月帰国。 10月、北陸学院保育短期大学附属幼稚園主事に就任。 11月、ライザー、横浜から帰米。
1956	4月、日本基督教団金沢教会長老に任職、以後1991年3月まで長老として奉仕
1958 (S33)	8月、粟津学園北陸幼稚園主事に就任（～94年3月）、同理事（～2002年3月） 10月、北陸学院保育短期大学新校舎落成式
1962	6月、北陸学院保育短期大学教授に昇任
1963 (S38)	4月、北陸学院保育短期大学は北陸学院短期大学（保育科・食物栄養科）に改組 7月、ケニア共和国の招きにより同国ナイロビの幼児教育及び同指導者養成にあたる（～1964年5月）
1965	4月、保育科にケニア共和国より留学生2名入学
1967 (S42)	4月、キリスト教保育連盟評議員（～1990） 4月、金沢大学教育学部講師（育児学担当）（～1995年3月） 10月、北陸学院短期大学校舎 三小牛に移転
1968 (S43)	4月、北陸学院短期大学保育科長（～1987年3月） 北陸学院短期大学保育科に専攻科開設 私立学校数職員教育功労者石川県知事表彰
1970 (S45)	1月17日、ライザー先生追悼会（金沢教会）（前年12月14日ミシガン州キャデラックにて逝去）、 8月22日、故ライザー先生記念会（高岡教会）
1971 (S46)	5月、学校法人北陸学院理事（～90年3月）
1977 (S52)	4月、北陸学院短期大学付属扇が丘幼稚園開園 6月、北陸学院ライザー記念館竣工。建設に尽力
1980 (S55)	文部省教育功労者表彰を受く
1987 (S62)	北陸学院短期大学付属幼児児童教育研究所長
1989 (H元)	北国文化賞を受賞
1990 (H2)	3月、北陸学院短期大学を定年退職。同短期大学名誉教授。
1991 (H3)	3月、北陸学院付属短期大学幼稚園顧問及び同付属幼児児童教育研究所顧問 4月、北陸学院短期大学非常勤講師（～94年3月） 下本多町より金沢市小立野に転居
1994	（平成6）年4月、粟津学園北陸幼稚園園長（～98年3月）
1998	（平成10）年3月23日、金沢市茨木町の新居に移る
2002	（平成14）年5月14日、ALS発病により入院
2003	（平成15）年9月20日逝去。行年88歳10ヵ月

1. 本稿の問題設定と構成

北陸学院の幼稚園は、わが国における現存する最古のキリスト教幼稚園であるが、保育者養成は、戦後、保育短期大学の設立からである。

北陸学院は1945年12月16日の常任理事会決議により、保母養成所の立ち上げをめざした。急には実現しがたい状況にあったが、1947年6月18日には、アイリン・ライザーの幼稚園長新任及び保母養成所設置立案依頼が決定された。⁷

1949年1月、「短期大学の制度化」が発表され、保母養成所設置構想は、短期大学設立に変化する（既設の諸学校も短期大学設立に動いている）。アイリン・ライザーは、ミセス・ウィン（Rowena Hudson Winn）と南信子の招聘に着手した。⁸

『北陸学院百年史』は、ミセス・ウィンについて「ミセス・ウィンは日本で生まれ、モール・ウィンの妻として長く金沢に住んだことがあり、夫の死後、アメリカで幼児教育を専攻し、ニューヨーク州のバッファローで教鞭をとっていた人で、短期大学の教授としてまことにふさわしい人物であった。」と記し、南信子については、「ライザーは聖和女子短期大学保育科⁹に教鞭をとっていた南信を招聘することに成功した。そして、その四月、南は本学院に着任し短期大学開設の準備に専任した。」、また別巻の『北陸学院百年史（部局史）』に、「本校の古い卒業生で、高岡に住む篤信の婦人南たみの子女で西宮の聖和女子短期大学保育科に教鞭をとっていた南信（のぶ）を招くことに成功した。南はその年四月、学院に着任し、保母養成機関設立事務に専任することになった。」と、記している。¹⁰

しかし、この記述からライザーがめざした保育理念は見えてこない。南信子の「証言」を基に、ライザーがめざした保育理念に迫ってみたい。以下の引用は、年表1と重なるが、本稿にとって最も重要な部分なので、そのまま引用する。下線は筆者による。

（証言）

「1949（昭和24）4月、アイリン・ライザー先生に懇請されて金沢に来たのですが、それは学院に保育短期大学を創設するためだけではなく、附属幼稚園の保育内容を新しくするためでもあったのです。これはあまり知られていないことなのですが事実です。招聘を受けたときにラ

イザー先生からそのことをはっきりと頼まれました。先生ご自身、附属幼稚園の保育が戦後の新しい教育思潮に合わないことをよくご存じでした。だって、フレーベルの「恩物」を、その教育的意味を吟味することもなく型通りに使っていたのですよ。それがキリスト教の保育だと言って。聖和では――私の学んだ頃はランバス女学院でしたが――すでに大正の末年頃から恩物使用による保育からの脱皮が試みられていました。ヘファナン女史が私の保育を観て讃辞を惜しまなかったと言われますが、私としてはランバスで学んだことを自分なりに研究して実践していたのであって、戦後になってはじめて時流に迎合するように新しい保育を試みたのではないのです。「自由保育」こそが――この言葉の誤った使い方についてはまた後で話しましょう――保育の基本であるという考え方を私は戦前から終始一貫もち続けています。」¹¹

上記の証言を整理してみたい。

1) 南信子が北陸学院に来た目的は、

- ① 学院に保育短期大学を創設するだけではなく、
- ② 附属幼稚園の保育内容を新しくするためであった。

2) 北陸学院附属幼稚園の保育をどう変えたかったのか？

（現状認識）ライザーは、附属幼稚園の保育が「戦後の新しい教育思潮」に合わないと見ていた。南信子は、その理由として、フレーベルの「恩物」を、その教育的意味を吟味することもなく型通りに使っていたことをあげている。

（改革の方向）南信子が戦前のランバス女学院で学んだ内容は、戦後の新教育と合致するものであり、戦後になって新しい保育を試みたのではない。聖和幼稚園で保育を参観したヘファナン女史は、南信子の保育を高く評価している。以上の内容の意味を、以下の2～6節で明らかにしていきたい。

2. 幼い頃の保育へのまなざしと保育者養成校の選択

南信子の保育へのまなざしは、すでに子どもの時に育まれていた。そして、その視点は、保育者

養成校での学びと合致し、北陸学院保育短期大学設立の理念にもつながっている。

(証言)

「私は保育者の道を本当は歩みたくなかったのです。・・・子どもの時から母の保育を見ていました。その保育が子ども心にもどうしても納得がいかないのです。あの型にはまったフレーベル式の保育ですよ。集団で歩くときに手を後ろに組ませる。・・・絵を描くといっても、ぬり絵ですね。自由に描けないのです。・・・クリスマスの聖誕劇といっても先生の書いたセリフを暗唱させるだけ。・・・こんな保育を見ていましたからね。まるで子どもは囚人ですよ。キリスト教の幼稚園といってもこの程度。先にも話しましたように、1949(昭和24)年に北陸学院に赴任したときも、その保育は母の時代の保育とほとんど変わりありませんでした。」¹²

下線部「あの型にはまったフレーベル式保育」の中身が具体的にわかる。

南信子は子ども心に保育は自由であるべきだと思っていた。「保育」が子どもを型にはめるものであるなら、保育者にはなりたくなかった、というのである。

しかし、この表現だけで、「フレーベル」を否定的にとらえたとみるべきではない。

たしかに、この時代の「フレーベル式保育」は、「手技」と呼ばれ、決められた授業時間に恩物(積木)を教師の指導にしたがって習うものであった。けれども、南信子が批判しているのは、「フレーベル式保育」と同時に行われた、規律を重んじ、型にはめる保育であったと考えられる。南信子は、保育の本質を見抜いていたというべきであろう。

さて、その南信子がなぜ保育の道に進んだかについては謎に満ちている。本人の証言によれば、女学校の卒業後、結核のため和歌山県南部(みなべ)で療養生活をしているときに伝道に来ていたランバスの学生たちに誘われたためだという。

ところで、北陸地方の高等女学校卒業者が指導的保育者を志す場合、どのような養成校に進学していたのだろうか。

北陸地方のキリスト教幼稚園の動向について、J K U (Kindergarten Union of Japan)¹³年報から関係する部分を抽出して翻訳し分析した、見玉衣子・山森泉による基礎研究「北陸地方のキ

リスト教保育史 JKU年報(3)~(6)」には、幼稚園のデータ(園名、創立年、所在地、Misson(母体となる教団)、園長名、主任名(その出身校)、園児数など)が表にまとめられている。南信子のランバス入学時にもっとも近い1923年当時の幼稚園の主任保母の出身養成校のデータを集計すると、東洋英和9 頌栄2、青葉(仙台)2、広島1、活水1である。東洋英和が圧倒的に多い。¹⁴「広島」は、広島女学校であり、1921年に合併してランバス女学院が生まれる。

ここで留意したいのは、キリスト教系養成校がわが国の幼稚園保育者養成を担っていた事実である。なかでも、東京では東洋英和が、関西では、頌栄保母伝習所と、ランバス女学院保育専修部とが、大正から昭和にかけての関西における二大保母養成機関であった。¹⁵

そうした環境のなかで南信子はランバス女学院に導かれた。¹⁶

3. 南信子が学んだランバス女学院の保育

南信子は、1937(昭和12)年4月、大阪のランバス女学院保育専修部に入学した。

ランバス女学院は、1921(大正10)年、広島女学校保母師範科とランバス記念伝道女学校が合併したものであり、その後、聖和女子学院、戦後、聖和短期大学となる。¹⁷

またちょうどこのとき、長崎の活水女学院幼稚園師範科は、1922(大正11)年3月卒業生を最後に、ランバス女学院に合併している。¹⁸

広島女学校~ランバス女学院の保育者養成の流れをつかむために、年表2を作成した。

この表は、左欄にI.ライザーと南信子の略歴、右欄に、広島女学校~ランバス女学院とその保育者養成をつないだ宣教師M.クック(Margaret M. Cook, 1870~1958)や活水女学院から加わった高森フジ(1877~1969)などの略歴を配し、流れを見通せるようにしたものである。

保育者養成校の歴史は、フレーベル主義から進歩主義へと変わっていく保育内容・方法の変遷とも関連している。保育者養成の指導的役割を担った婦人宣教師たちが、いつどこで何を学んで日本にやって来たかに注目したい。

まず、広島女学校についてである。

広島女学校は、1886（明治19）年にアメリカから戻った砂本貞吉牧師により、W. R. ランバス宣教師らの援助で創立された。その翌年、ミス N. B. ゲーンズ（Nannie B. Gaines, 1860～1932）が来日し、校長に就任した。ゲーンズは、かねてより幼児教育に深い関心を持っており、1892（明治25）年に附属幼稚園を創設した。キリスト教の由に敬遠され入園者13名のスタートだった。神戸の頌栄保母伝習所のミス・A・L・ハウ（Annie Lyon Howe, 1852～1943）¹⁹の好意で留学を終えたばかりの甲賀ふじ（1856～1937）²⁰、松浦晶子の両教師を与えられ、上流川町に新園舎を建てフレーベル主義の教育を行った。²¹

1904年（明治37）年、M・クックが赴任する。

幼稚園教育がフレーベル主義から進歩主義へと変わっていった経緯について、黒田実郎は次のようにまとめている。²²

「初期の時代の保育は、幼稚園（Kindergarten）の創始者F. フレーベルの教えを忠実に踏襲するものであったが、大阪に移転して、ランバス女学院附属幼稚園となった頃から、M. クック先生の指導で、当時アメリカ幼児教育の主流であった進歩主義（progressivism）にもとづく自由保育の形態が取り入れられた。その保育理念は、その理論的根拠を、J. デューイやW. キルパトリックの経験主義哲学、S. ホールの機能主義心理学、A. ゲゼルの成熟理論にもとめ、学習の主体を教師にではなく、子どもに置く、いわゆる児童中心主義で、その後の聖和保育の根幹をなすものとなった。」

M. クックはアトランタの幼稚園師範学校を終えて、ニューナンの幼稚園に務めていた²³。

クックは、当時わが国の幼稚園教育に大きな力をもっていたフレーベルの恩物使用に対して、フレーベルの幼児教育への崇高な理念と深い洞察に影響を受けつつも、それを刺激として新しい進歩主義的教育理念を積極的に教育の方法に採用しようとする意欲をみせた。

クックは1911（明治44）年の休暇帰国の際、コロンビア大学²⁴において新教育をデューイらから学んだが²⁵、翌年広島に帰任するや早速それを実際に応用した。従来なされていたような教師の指導による手工（技）から全面的に幼児自身に

よる自由な製作に切りかえたのである。さらに、これまでの保育時間割を廃止して自由作業、自由遊びに重点をおいた。²⁶

しかし、クックがランバスで進歩主義教育を本格的に始めるのは、1928（昭和3）年からである。

1928（昭和3）年、「クックは立花富主任保母を呼び、はっきりと自由作業を取り入れた保育、すなわち進歩主義教育を推進するから、ピーヴィー、フィールドの両教師の指導を受けてよく勉強するようと言い渡した。・・・彼女は休暇中にコロンビア大学のティーチャーズ・カレッジ幼稚園教育部門でパティ S. ヒルのもとで学んでおり、その考えに大いに共鳴し、これをランバスで実現しようとした結果なのである。」²⁷

しかし、保育の実際は手探りであった。宣教師の指導をなかなか理解できず、あとでデューイを読んでみて言われていたことが理論的に理解できたという。それでも立花富は、「あくまで子どもが中心で、教師はよく子どもを観察して、子どもの求めるものから教育するというやり方で、今までのように教師が立てた計画で進めるのではない。この新しいやり方で始めると以前と比べて、子どもが生き生きしだした。見ていて面白いんです。苦労はしましたが、形式的に保育するのではなくて、子どもから、絶えず刺激があるでしょう。子どもから教えられるわけです。それがこちらにはとても楽しい作業でしたね」と述懐している。²⁸

南信子は、この立花富から保育の実際を学んだ。

立花富はランバス女学院保育専修部の第二回卒業生（大正期の末）である。南信子は立花主任の後を受けて、1945（昭和20）年3月敗戦の年に聖和幼稚園の主任になっている。

ここで、南信子が高森フジを、影響を受けた先生たちの筆頭に掲げていることに注目したい。「実際の保育ということになりますとやはり立花富先生ですね。」という表現には、高森フジからは保育理念を学んだと読むことができる。

『聖和保育史』「第六章 聖和を築いた人々」には、甲賀ふじ、N.B. ゲーンズ、M.M. クックの次に高森フジ、が取り上げられている。²⁹

高森フジは、「コロンビアを中心とするアメリカの進歩主義的教育運動」に直接ふれて、それを学び取った日本に数少ない幼児教育者の一人で

あった。戦争という暗い谷間の時代を経験したにもかかわらず、フジらによって接木されたアメリカの進歩主義的幼児教育の伝統は、現在の聖和における保育の中に引き継がれている。³⁰

フジは、1902（明治35）年、活水女学校大学部を卒業して、女学校の英語教師に就任したが、翌年付属幼稚園の保母主任となった。保育のかたわら幼稚園保母養成科設置のためにアメリカからやってきたメリー・A・コーディの授業の通訳にあたり、1907（明治40）年6月活水女学校幼稚園師範科二年課程を卒業、1913年3月には同校専門部音楽科も卒業している。

1914（大正3）5月、フジの留学が実現する。フジはまずコーディの出身校であるシカゴのナショナル・カレッジに入学、2年課程を1年で終了し、さらに1915年コロンビア大学に入学、1916年6月卒業、さらに2年の大学院の課程を終え、帰国と同時に活水女学校保育専修部長に就任した（1918年2月～1920年3月）³¹。しかし、1921（大正10）年、大阪に新設されたランバス女学院に教授として招聘され、赴くことになる。

留学時、シカゴには、彼女が「教育の精神的な方面を強く教えられた」というエリザベス・ハリソンが有力な教授として活躍しており、コロンビアには、後年フジが訳出することになった「コンダクト・カリキュラム」（「幼稚園及び低学年の行為課程」1936（昭和11）年）の編集者パティ・S・ヒルがいて、親しくその指導を受けた。また、そこには新しい幼児教育の理論面の指導者ジョン・デューイがいて、フジはデューイからも直接講義を聞いたという。

以上、M.クックと高森フジの学びのプロセスを、『聖和保育史』を中心に引用・要約してきた。広島女学校保母師範科を創設したゲーンズは、アメリカでの教師生活の頃に、パティ・スミス・ヒルやエリザベス・ハリソンと親交があり、幼児教育について深い認識を持っていた³²。クックはゲーンズからその路線を受け継ぎ、高森フジを得て、新しい保育への転換をめざした。³³

宣教師たちの多くは米国でのフレーベル教育論争や反「フレーベリアン」の動きを敏感にキャッチし、それを十分理解している言葉が“Annual Report”に見られる。³⁴しかし、「一般的にはわが国の幼児教育界は旧態依然としたフレーベルの恩

物中心の保育法が支配していたようである。³⁵」

南信子のランバス女学院入学は1937（昭和12）年であり、本格的に進歩主義教育が開始された1928（昭和3）年から9年が経過している。

4. ランバス女学院卒業後の南信子の歩み、北陸学院に招聘されるまで

ランバス女学院での3年の学びを終えた南信子は、1940（昭和15）年4月、岩国教会付属幼稚園主任となり、翌年度から日本メソジスト大阪鶴町教会付属幼稚園に2年勤務する。

すぐに母校の幼稚園勤務とならなかった事情は、年表2からわかる。

ランバス女学院は、1940年神戸女子神学校との合同を協議し、1941年3月には幼稚園をやめている。4月に両校は合同して聖和女子学院となり、岡田山（現在地）に移転するが、幼稚園は開園できないままであり、関西学院教会付属仁川幼稚園を実習園とした。

戦争が影を落とした時代であった。1941年、宣教師たちは帰国せざるをえなかった。³⁶

1942年6月に聖和幼稚園は開園して、その翌年1943年に南信子は赴任する。1945年に立花富から主任を引き継ぐが、戦争のため7月から休園とせざるを得なかった。

10月、幼稚園は再開、そのちょうど1年後にライザーが金沢に戻るのである。

さて、戦後まもなく聖和幼稚園の保育を見たヘファナン女史が「讃辞を惜しかなかった」ということの意味を考えたい。

ヘファナンとは、連合国最高司令部（GHQ）内に設置された民間情報教育局（CI&E / Civil Information and Education Section）教育課において、わが国の初等教育を指導したヘレン・ヘファナン（Helen Heffernan 1896～1987）であり、1948年（昭和23）に刊行された「保育要領」の作成にも関わり、日本の保育界に大きな影響を与えた人物である。

1947年秋、ヘファナン女史の初等教育の講演会があり、その折りに聖和幼稚園を参観し、南信子主任をはじめとする聖和の保育を見て「ワンダフル」と評したという。³⁷

聖和幼稚園での「幼児の興味や関心、経験の重視」

年表2 南信子 学びの背景

年	I. ライザー、南信子	M. クック、高森フジ、広島女学校・ランバス女学院・聖和女子学院 「聖和幼稚園年表」(『聖和幼稚園100年史』)に追加
1887 (M20)	I. ライザー	砂本貞吉による女子の私塾と他の二つの私塾が合同して、広島英和女学校開設される。ランバス父子の協力を得る。ゲーンズ10月に着任。
1889 (M22)		(10月、頌栄保母伝習所開設、11月、同幼稚園開園)
1891 (M24)	1月22日、ミシガン州グレイセリングに生まれる	9月、幼稚園開設。甲賀ふじ就任(1897年7月まで)
1892 (M25)		2月、幼稚園認可おける。ゲーンズ園長に就任
1895 (M28)		保母養成科開設
1896 (M29)		校名を 広島女学校 と改称
1904 (M37)		クック、広島女学校に就任
1906 (M39)		クック、幼稚園の責任者となる。JKU設立
1908 (M41)		保母師範科生に無試験検定認可される
	アルマカレッジに入学し、幼稚園教員養成を専攻	
1911 (M44)	ミシガン州グラッドストーン公立幼稚園に勤務	クック、休暇帰国の際、コロンビア大学において新教育をデューイから学ぶ
1914 (T3)		5月、高森フジ、シカゴのナショナルカレッジ(1年)に学ぶ。
1915 (T4)	キャデラックの公立幼稚園	高森フジ、コロンビア大学入学、翌年6月卒業、引き続き大学院に。
1917 (T6)	シカゴ大学入学、幼稚園・小学校の主事科でスーパーバイザーコースを学び翌年卒業	
1918 (T7)		1月、高森フジ、活水女学院保育専修部長(～1920年3月)
1919 (T8)		11月、神戸にて開催の南メソジスト教会宣教部年会議にて、広島女学校保母師範科とランバス記念伝道女学校の合併決議される
1921 (T10)	9月1日、北陸女学校附属幼稚園主事	3月保母師範科、ランバス女学院保育専修部となり大阪へ移転。クック、バツチャーの両教師と保母師範科の在學生5名も大阪へ移る。4月、ランバス女学院保育専修部開設。高森フジ教授赴任。9月、幼稚園開園
1923 (T12)		5月、新校舎・新園舎竣工
1928 (S3)		保育専修部は修業年限を2年から3年に変更、クック院長代理となる。保育に 進歩主義教育 を取り入れる
1936 (S11)	南信子	P・S・ヒル著 高森藤訳「幼稚園及び低学年の行為課程」刊行
1937 (S12)	4月、ランバス女学院 保育専修部に入学	クック、キリスト教保育連盟の関西部会主催の幼稚園百年祭において「フレーベル、その幼稚園の教育への貢献」と題して講演する
1938 (S13)		クック、定年により帰米。後任の保育部長にA. ピーヴィー、広瀬ハマコ院長に就任、幼稚園園長を兼任
1940 (S15)	3月、同研究科卒業。4月、岩国教会附属幼稚園主任	1940神戸女子神学校と合同への話し合いを始める
		3月、ランバス幼稚園は終止符をうつ。
1941 (S16)	4月、日本メソジスト大阪鶴町教会附属幼稚園。	4月、神戸女子神学校とランバス女学院は合同し、 聖和女子学院 となる。附属幼稚園は開園するにいたらず、1年だけ関西学院教会附属仁川幼稚園を師範幼稚園として使用する
1942 (S17)		6月、幼稚園設置認可され、聖和女子学院附属幼稚園開園
1943 (S18)	聖和女子学院附属聖和幼稚園	1月、幼稚園園舎建築認可。5月、保育日誌に初めて警戒警報の記事が出る
1944 (S19)		仮園舎の改造完成にともない、新園舎の建築契約を解消
1945 (S20)	4月、聖和女子学院附属聖和幼稚園主任(保育学部で教える)	7月1日、幼稚園は警報サイレンや空襲のため、保育がしばしば中断されるようになり、夏休みを繰り上げて休園。10月10日、再開。
1946	10月23日、ライザー、金沢に復帰	
1947		1月、ピーヴィー米国より聖和に帰校
1949	4月、北陸学院幼稚園主事	
1950	北陸学院保育短期大学	聖和女子短期大学認可。聖和女子短期大学附属幼稚園開園
1951		1月、附属聖和幼稚園の新園舎、河原町に完成。

は、「保育要領」の精神に沿ったものであり、南信子が「私としてはランバスで学んだことを自分なりに研究して実践していたのであって、戦後になってはじめて時流に迎合するように新しい保育を試みたのではない」というのはまさにその通りである。

「保育要領」は、幼稚園だけでなく保育所や家庭での保育、すなわち幼児の生活全体を保育の対象とした「手引き」であり、幼児の興味や関心、それに基づく経験が重視されていた。³⁸

本稿の冒頭に記したように、1946年10月に金沢に戻ったライザーは、1947年6月の北陸学院理事会の決定により、保母養成所設置計画に向かう。その時から1949年4月、南信子が幼稚園主事として着任するまで、実に短い期間である。公刊史料からは南信子にいつ招聘の話があったかわからないが、立花富から主任を引き継ぎ、ヘファナンに高く評価された南信子の異動は、聖和側にとっては事件だったのであろう。³⁹

金沢にやってきた南信子は、困難な諸課題に直面する。保育短期大学設立10年の節目に次のように書いている。

「創設時代は戦後の混乱の中に複雑な社会状況を背景にし、六十有余年の歴史をもつ北陸学院は今や只、古い伝統を守りその老朽校舎に安閑としていることができず、新しい時代にむかつて新しい歩みを初めなければならない時であったといえる。しかし短期大学には輝かしい開学の歴史は何一つない。私は開学一年前の昭和二十四年に、この短期大学設置の仕事の一端を負うため、ライザー先生より要請されてこの北陸学院に赴任したが、建物もなく人もなく、経済的裏付けもないこの計画は決して容易なものではないことを感じた。しかし何故か心動かされ決意をしてきたのであった。」⁴⁰

また「証言」ではよりリアルに語っている。「このような保育を金沢に定着させるために私がどんな苦勞をしたか、ちょっと言葉では言えません。誤解だけではなく中傷もされました。今度金沢に来た南という若いのが、こともあろうに恩物を捨てた、などと言って。母の会やノーマル・クラス⁴¹を通して、文字通り必死に闘いました。」⁴²

南信子が「闘ったもの」については6で検討す

る。その前に、ライザーの経歴と保育観についてみておきたい。

5. アイリン・ライザーの経歴と保育観

アイリン・ライザーは1891（明治24）年1月22日、アメリカ合衆国ミシガン州のキャデラック市に近いグレイセリングで生れた。父母はキャデラック長老教会会員である。

ミシガンの長老教会に関係あるアルマカレッジ（Alma College）に入学し、幼稚園教員養成を専攻した。1911年、卒業後、ミシガン州グラッドストーン公立幼稚園に勤務、1915年、キャデラックの公立幼稚園に転じた。1917年、シカゴ大学に入学、幼稚園並びに小学校の主事科でスーパーバイザーコースを学び翌年これを卒業した後、イリノイ州のオークパーク公立小学校、次に、ノースダコタ州デッキン公立小学校に教鞭をとった。⁴³

1921（大正10）年9月1日、北陸女学校付属幼稚園主事に就任。それから隠退のため帰国するまで、北陸学院のために力を尽して働いた。なお、戦中の1941（昭和16）年3月21日に金沢を離れ帰米したが、戦後1946（昭和21）年10月23日に復帰している。

「証言」によると、ライザーは南信子に保育短期大学創設だけではなく、附属幼稚園の保育内容刷新を依頼している。「先生ご自身、附属幼稚園の保育が戦後の新しい教育思潮に合わないことをよくご存じでした」。

ライザーは『保育短期大学十年史』（南信子編）に次のように書いている。

「時代の要求は刻々と変って来、教える方法も亦変って来ます。私が出た学校の教育方法は割合に進歩していたものでしたが、随分昔のことであったので、今その方法を先生が使えばおかしいと思われるでしょう。しかし私はその当時の学生として、喜んでフレーベルの第一恩物（まり六つ）で意味のあるゲームを作り、又第六恩物（積木）を箱から出したり入れたりして一生懸命子供達に教えたものです。今私は園児のしている色々のことに感心いたします。又先生や学生の使っておられる本、視聴覚材料その他の色々のものを見るにつけ、私もそれを使って見たいという気持で一杯になります。」⁴⁴

ライザーは「恩物を使う保育」を学んでいた。自分が学んだ教育方法とは異なるものへと変革するために南信子を招いたと言えるのである。

6. 「フレーベルを否定する」意味とは

終わりに、「フレーベルの「恩物」を、その教育的意味を吟味することもなく型通りに使っていたのですよ。それがキリスト教の保育だと言って」という発言から見えてきた課題を整理しておきたい。

南信子が批判しているのは、①恩物を型通り使うフレーベル式保育と、②フレーベル式保育と同時に行われた、規律を重んじ型にはめる保育であった。そうであるならば、たんに恩物(=フレーベル)を否定すれば進歩主義に基づく新教育になるわけではない。恩物が捨てられても②の問題は残るからである。ライザーの願いや南信子の努力にもかかわらず、恩物否定はむしろフレーベルの教育思想を学ぶことから離れることに通じ、それゆえ新教育の本質理解から遠ざかる可能性もあったと考えられる。

フレーベルの教育学は、「我が国幼児教育の開拓発展に絶大な貢献をした……が、やがてその最大の特色である恩物の使用が形式的に固定化され、その象徴主義が……誤解されるにいたったことは悲しい宿命であった。それはフレーベル教育学そのものの誤りであるよりは正しい理解を欠いた者の招いた結果であった。」⁴⁵

高森フジは、一貫して「わたしの考えはフレーベルが中心じゃ。人間の教育というのは宗教でなければならぬ。宗教という少し強く聞こえるかもしれないが、信念というように言ってもよい。信念なしにはやれない。」と説き続けた。⁴⁶ ランバス～聖和女子学院では、高森フジによって子どもたちを尊重するフレーベル精神の伝授は続けられたとみることができる。進歩主義がフレーベル思想本来への回帰やそのための再解釈とすれば、旧来の方法へのノスタルジーではなく、自由保育の基盤を確かにすることにつながったはずである。

次に、③「フレーベルをキリスト教保育と関係づけてきた」可能性に触れたい。

実はフレーベルの世界観と人間観は汎神論的な背景をもつゆえに、日本人には受け入れやすいものであったと考えられる。進歩主義は自由主義的

キリスト教を基礎に主張されたが、フレーベルの世界観と人間観を批判なしに受け入れると、福音的キリスト教信仰と異なる道に足を踏み入れることになる。南信子はこの問題をどのようにとらえていたのだろうか。この問いに対する答えは、次の課題としたい。

<注>

- キリスト教幼児教育・保育の理論形成に向けて機運が高まったのは1960～70年代であった。南信子はその主要研究に加わっている。
 - ・日本基督教団宣教研究所『キリスト教幼児教育の原理』日本基督教団出版局、1962年。
 - ・黒田成子・松川成夫・奥田和弘・今橋朗編『キリスト教幼児教育概説』同、1974年。
 - 南信子「キリスト教の幼児観」(第1部第2章) 同上書、34～46ページ
 - ・日本基督教団全国教会幼稚園連絡会編『新キリスト教幼児教育の原理』同、1979年。
 - ・『幼な子に生きよう シリーズⅠ・キリスト教保育』(キリスト教保育連盟、1982年12月)
 - 南信子「キリスト教保育の今日的課題」215～258ページ(初出「キリスト教保育」1981.1～3)
 - ・『幼な子に生きよう シリーズⅡ・保育者像』(キリスト教保育連盟、1983年3月)
 - 南信子「幼児とのであい」17～29ページ(初出「キリスト教保育」1976.11)
- ☆北陸学院にある南文庫(蔵書及びアルバム類)は整理された状態にはないが、蔵書構成から、常に新しい知識を吸収しようとした姿が浮かび上がる。
- 『花の蕾のひらくとき』403～404ページ。
- この対談は、「1999(平成11)年10月から11月にかけて三回にわたって輪島が南先生のご自宅にうかがいインタビューしたテープを基に、輪島の責任において再構成し、文章化したものである」(同書404ページ)。密度の濃い内容にまとめられている。
- 対談の後半部分「キリスト教保育の哲学」は、年譜と直接連動しないので、掲載していない。
- 『幼な子とともに 南信子先生から学んだこと』シャローム印刷、2004年、18～23ページ
- 『幼な子とともに』では、南信子の1945(昭和20)年4月の箇所に、「聖和女子学院保育専攻科教師及び同付属聖和幼稚園主任」と記載されているが、『聖和八十年史』(1961年刊)の聖和女子学院教師の異動記録126～129ページに南信子の名前はみあたらない。一方、同史163ページの「聖和幼稚園1942年以降の教員一覧」には、南信子の名前が記載されている(『聖和幼稚園100年史』も同様)。南信子の本務所属は幼稚園であり、聖和女子学院に出講していたと考えられる。また教えていたのは「保育専攻科」ではなく、保育学部本科(2年)と1944(昭和19)年開設の研究科(1年)であったと考えられる。そのため、年譜には「聖

和女子学院付属聖和幼稚園主任（保育学部で教える）」と記載した。

- 7 『北陸学院百年史』1990年、476ページ。
- 8 同上書、477ページ。
- 9 短期大学制度の開始は1950年度からであり、この段階では、聖和女子学院である。聖和短期大学は1950年設立。これについては、小林恵子『日本の幼児保育につくした宣教師 上巻』（キリスト新聞社、2003年）228ページの記述も同様になっている。
- 10 『北陸学院百年史（部局史）』1990年、41ページ。南たみ（1889～1945）については、『続・キリスト教保育に捧げた人々』（キリスト教保育連盟、1988年3月）、44～45ページに、南信子がまとめている。また『キリスト教保育に捧げた人々』（キリスト教保育連盟、1986年7月）には、ライザー（南信子）やウイン（番匠鉄雄）なども収められている。
- 11 『花の蕾のひらくとき』392ページ。
- 12 同上書、394ページ。
- 13 Kindergarten Union of Japan（通称JKU）は、1906（明治39）年、神戸市の頌栄幼稚園および頌栄保母伝習所を開設・運営していたミス・ハウの呼びかけによって、当時、わが国の中でキリスト教諸教派宣教師によって格別の連携もなく行われていた保育の関係者が相集まって作った団体である。JKUは毎年夏、軽井沢で研修と一年の活動報告を行なった。その記録は1907年から毎年、年報として出されたが、単なる報告だけではなく各地の園および保育の写真が添えられており、今日、貴重な記録になっている。
- JKUは、1940年7月、わが国が国策により外国人を帰国させた時期に、その10年ほど前からできていた日本人の団体である基督教保育連盟に後事を託してその働きを終えた。
- （児玉衣子ほか「聞き書き 北陸地方のキリスト教保育史（1）福井県」北陸学院短期大学紀要34（2002）、1ページから要約。）
- 14 『北陸地方のキリスト教保育史 JKU年報』の発表年度、号数、扱っている「JKU年報」の号数（年度）は、以下の通りである。
- （2002は、「北陸学院短期大学紀要2002年度」を表す。2008年度から大学設立により「北陸学院大学・短期大学紀要」となる。2009年度から該当）
- （1）児玉衣子2002 34号：「JKU年報」1－5号（1907-1911）
- （2）児玉衣子2003 35号：「JKU年報」6－8号（1912-1914）
- *（3）児玉衣子2004 36号：「JKU年報」9－12号（1915-1918）
- *（4）山森泉・児玉衣子2007 39号：「JKU年報」13－16号（1919－1922）
- *（5）山森泉2009 1号：「JKU年報」17－21号（1923-1927）大正2－昭和2
- *（6）山森泉2010 2-1号：「JKU年報」22－30号（1928-1939）昭和3－14
- ★上記（1）の「聞き書き 石川県のキリスト教保育

を担った人々（1）」には、北陸地方から進学して地元幼稚園に勤めた5人からの聞き書きがある。戦前に学んだ3人のうち、松本 光（てる）さん=1914年生と吉村鋪子（のぶこ）さん=1920年生は、共に北陸女学校を卒業、東洋英和女学校保母師範科（2年間）に、1931年と1937年（南信子のランバス女学院入学年と同じ）に入学し、卒業後、前者は北陸女学校附属幼稚園第二（高岡）・馬場幼稚園（金沢）に勤務、後者は川上幼稚園主任として赴任している。

- 15 「明治期に創設された東京女子高等師範学校の保育実習科と、東京府教育会保母伝習所が、一般の保母の需要に対する供給源であったが、そのほかはすべてキリスト教関係の保母養成施設がキリスト教主義幼稚園の保母および一般の保母を養成してきた。キリスト教関係の保母養成施設はいずれも程度が高く、修業年限二か年で、専門的な保育者を養成したが、その養成人員は非常に少数であった。」（『日本幼児保育史第三巻』（日本保育学会、1969年）213ページ）。大正期に入ってからこの傾向はほとんど変わらない。

東京では東洋英和が、関西では、頌栄保母伝習所と、ランバス女学院保育専修部（1941（昭和16）年に聖和女子学院に）とが、大正から昭和にかけて「関西における二大保母養成機関として、わが国保育界に大きな貢献を」していた（同書226ページ）。なお、ここでは原文の通り「保母」としたが、本稿本文では「保母」を使用している。

- 16 もし南信子が頌栄を選択していたらその後の歩みは変わったかもしれない。頌栄はフレーベル式を貫いているからである。しかし、筆者は、この両校のめざした保育を保育内容と方法の十分な検討なしに単純には比較できないと考えている。
- 17 1964（昭和39）年 聖和女子大学、1981（昭和56）年 聖和大学に、2009年4月、学校法人聖和大学は創立者と同じくする学校法人関西学院に合流し、保育部門は関西学院聖和短期大学となった。
- 18 『活水学院百年史』1980年3月、124ページ。
- 19 ハウは、頌栄保母伝習所の創立者。神戸の頌栄は、明治22年から、神戸組合教会が設立、ミス・ハウが中心である。
- 20 甲賀ふじは、日本の幼児教育のパイオニアとしてよく知られている。1887（明治20）年、幼稚園の教授法を学ぶという明確な志をもってアメリカに留学し、4年の留学生生活を終えて1991年1月から神戸の頌栄幼稚園で働く。しかし、同年9月には幼稚園が開設される広島で新たな歩みを始めている。それぞれのミッション・宣教師たちの連携と、働き人の用いられ方は実にダイナミックと言わざるを得ない。
- ハウが伝習所と幼稚園を開始した時期の母親宛1889年10月26日の書簡には、「予定していたおフジさんが来られなくなって、ここでは代わりの人間が見つからず、その上、建物は建ってしまったので始めざるを得なくなり、実際始めてしまったのです。結果は、この私が被らなくてはなりません。」（p.64）と書かれている。おフジとは甲賀ふじであろう。「来られなく

なった理由」は、ふじの留学（1887年5月から）がケンブリッジ（アメリカ）での2年の後、ボストンでさらに半年学びを継続したため、頌栄保母伝習所及び幼稚園の開設に間に合わないことを指している、と推測される。この書簡から、頌栄伝習所と幼稚園開設が全くの手探り状態であったことがわかる。にもかかわらず、ハウはようやく着任した甲賀ふじの広島行を認めたのである。

1891年5月名古屋発書簡によると、ハウが甲賀ふじを同行させて、神戸から東京に向けて列車で旅行している（pp.107～108）。1月からふじは頌栄幼稚園保母である。

それだけではない。甲賀ふじの広島での勤務は1897年7月までのほぼまる6年であり、広島を去って9月14日ハワイに到着している。日系移民の子ども達の幼稚園教育とキリスト教福音伝道に力を尽くすためである。このときの推薦者はハウであり、ハウの紹介が受け入れ先の判断を固めさせている。（勝村とも子「幼児教育のパイオニア」甲賀ふじと福音伝道（1）——1897年の渡米までを中心に——」（聖母被昇天学院女子短期大学紀要31, 2005年3月）なお、甲賀ふじのわかりやすい年譜は、勝村とも子「幼児教育史研究—無償幼稚園運動（2）甲賀ふじとハワイ島コハラ幼稚園 [1902年—1904年]—」（『松蔭東女子短期大学研究論集11』（2010）、48ページ）を参照。

21 この部分は、Web上の「広島女学院ゲンス幼稚園沿革」（<http://www.hju.ac.jp/~gensuyo/enkaku.htm>）から引用。同幼稚園は、原爆により17年間休園していたが、移転した大学の校地内に1962年広島女学院ゲンス幼稚園として再興された。

22 黒田実郎「聖和保育のめざすもの」（『聖和幼稚園100年史』1991年）6ページ。黒田実郎は、当時の園長・聖和大学教授。

23 酒井玲子によると、アトランタの幼稚園師範学校以外の卒業は確認できないという。酒井玲子『わが国にみるフレーベル教育の探求』共同文化社、2011年、「第2章婦人宣教師によるフレーベル教育の展開」84ページ。

24 デューイは、1894年、新設されたシカゴ大学に哲学科主任教授として就任。1896年1月、実験学校 Laboratory School をつくる。3年間の実験の報告をもとに出版されたのが『学校と社会』（1899年）である。1904年からニューヨークのコロンビア大学で哲学教授となり、晩年まで50年近く勤めている。1916年『民主主義と教育』を発表。

25 ハウも1903（明治36）年から2年半の帰米中、シカゴ大学の冬学期に参加し、直接デューイから自由と自発性、個性重視の改革的な新教育理論を学んでいる。（酒井、78ページ）

26 『聖和保育史』58～59ページ。

27 『聖和幼稚園100年史』34ページ

28 同上

29 高森フジについては、『聖和保育史』403～408ページをまとめたものである。聖和の流れには、二人のふじがそれぞれの養成校を離れてかかわっている。時代は異なるものの混同しがちであり、なおかつ両者とも名前に多様な表記がみられるので、本稿では『聖和保育史』にしたがって、甲賀ふじ、高森フジを基本とした。

30 『聖和保育史』407ページ。高森フジは1877年（明治10）4月28日、熊本生まれ。フジが最も活躍したのは、ランバス女学院においてであるが、ランバスから聖和女子学院へ、そして一時退職したが、戦後再び聖和女子学院、聖和女子短期大学の教壇に立ち、幼稚園教育、保育法等を担当した。なお、宍戸健夫は、早くから高森フジに注目している。宍戸健夫「高森富士—キリスト教的「児童中心主義保育」の展開」（岡田・宍戸・水野編『保育に生きた人々』風媒社、1971年、117～132ページ）

31 『活水学院百年史』111ページには、「高森藤・大正7年1月就任・9年4月退職」と記されている。

32 『聖和保育史』396ページ。

33 Gaines の読みは、広島ではゲンスを、聖和ではゲーンズを使っている。

34 酒井玲子『わが国にみるフレーベル教育の探求』87ページ。

35 『聖和保育史』401ページ。

36 ライザーも3月に帰米している。（『北陸学院125年史』2011年、82ページ）

37 『聖和幼稚園100年史』56ページ。

38 向平知絵「保育制度の成立過程に関する一考察—戦後幼稚園制度を中心に—」（京都女子大学大学院現代社会研究科論集4, 2010年3月）63～64ページを参照した。1956（昭和31）年になると、「保育要領」に代わって「幼稚園教育要領」が出され、対象を幼稚園教育に限定し、内容についても幼稚園と小学校とのつながりが強調されるようになった。

39 すでに見てきたように、甲賀ふじも高森フジも、養成校を離れて新たな任地に向かっている。高森の異動は活手に深刻な影響を与えた。

40 南信子「創設の経過」『北陸学院保育短期大学十年史』20～21ページ。

41 キリスト教系幼稚園の園長や主任が集う学習会のことであり、現在もその名称で続けられている。ノーマル（nomal）は、「normal school 師範学校」（現在では teachers college）のように古い用語である。

42 『花の蕾のひらくとき』397ページ。

43 『北陸学院百年史』562～563ページ（『おもかげ アイリン・ライザー先生の生涯』（1970年10月）掲載「神に捧げられた生涯」から要約）。

44 「北陸学院保育短期大学に贈る言葉 据えられた礎石」（『北陸学院保育短期大学十年史』1961年、5ページ、7～12行）。

45 『聖和保育史』149ページ。

46 『聖和保育史』407ページ（雑誌「保育」1941年7月号）。